

For your Lifework

「生物」「生命」を研究・育成する施設から
読者の皆さんへのメッセージ



公益財団法人 山階鳥類研究所 [Vol.3]

〒270-1145 千葉県我孫子市高野山115
TEL: 04-7182-1101 URL: <http://www.yamashina.or.jp/>

文● 岩見 恭子 (山階鳥類研究所 自然誌研究室 研究員)

標本を未来に残す仕事

山階鳥類研究所には約7万点におよぶ国内最大の鳥類標本コレクションを収蔵しています。そして現在も標本を収集し、その数は増加しています。すでに多くの標本を収蔵しているにも関わらず、さらに標本を集めるのはなぜでしょう？ 研究所に収蔵されている標本の多くは仮剥製とよばれる学術標本です(図1)。仮剥製は羽色の観察や外部形態の計測がしやすく、収蔵に適した直立した姿勢をしています。内臓や筋肉といった腐敗する組織はすべて取り除き、乾燥させているため、適切に保存すれば数百年にわたり保存することが可能です。種や亜種を決める鳥類分類学はこの仮剥製が基礎となっています。

さらに標本はその個体が採集された時代や環境を代表する貴重な証拠といえます。たとえば、沖縄島とその周辺の島に生息していたリュウキュウカラスバトはすでに絶滅していますが、残された標本には採集地と採集日がラベルに記載されて一緒に保存されており、沖縄島や南大東島での生息を裏づける証拠となっています。



図1 鳥類の仮剥製(アカオネッタイチヨウ)

標本から過去の環境を知る手がかりを得ることもできます。科学技術の発達によって、標本の羽毛や微量な組織からその種が食べていた餌を推測したり、その個体の生理状態を知ることも可能です。このような分析から、過去にさかのぼって、その種が生息していた環境を推測し、個体群の栄養状態など基礎的なデータを集めることができます。研究所には1800年代からの標本が保存されていますが、その多くは現在のように環境が破壊され、鳥の種や個体数が減少する前に採集された標本です。これらの標本を用いることで、たとえば、海洋環境の変化によって海鳥の餌種が過去と現在でどのように変化しているかなどを知ることができます。このような研究を支えるために、同じ種であっても長期間にわたってさまざまな地域で標本を集め続ける必要があるのです。

広域的かつ経年的に標本を集めるには、日本各地に出かけて行き標本を採集しなければなりません。特定の地域で特定の種を狙って捕獲するというのはなかなか大変なことです。そのため、研究所では鳥体を収集している各地の博物館や大学、環境省の施設等から冷凍保存している鳥の事故死体を寄贈してもらっています。研究所からは地域に残す標本や試料を提供し、協力体制を構築して多くの個体を収集することに努めています。それでも収集が難しい種は、所員が自ら標本を採集しに行きます。無人島や山岳部などあまり人が訪れない地域での採集もおこなっています。

研究所では多くの標本を未来に伝えるべく、鳥体を収集し標本を製作しています。数百年にわたって残る標本を製作するには仮剥製の製作の技法を学び、訓練する必要がありますが、現在、この技法を学ぶ機会が減ってきています。標本を専門的に製作する剥製師も減少ってきています。山階鳥類研究所では製作技法を学ぶ機会を増やし、国内の多くの機関で標本を残すことができるように剥製製作技術講習会を各地で開催しています(図2)。これまで学芸員や学生の皆さんだけでなく、鳥類に興味のある一般の方も参加して標本製作を学んでいます。数百年残る標本作りに興味のある方はぜひご参加ください。



図2 剥製製作技術講習会